

群 教 セ	G10 - 01
	令3.278集
	道徳

道徳的価値に向き合い、 自分の思いや考えを深める児童の育成

—ICTを活用した「児童の自己表現」と

「教師の記録」を通して—

特別研修員 大河原 麻紀子

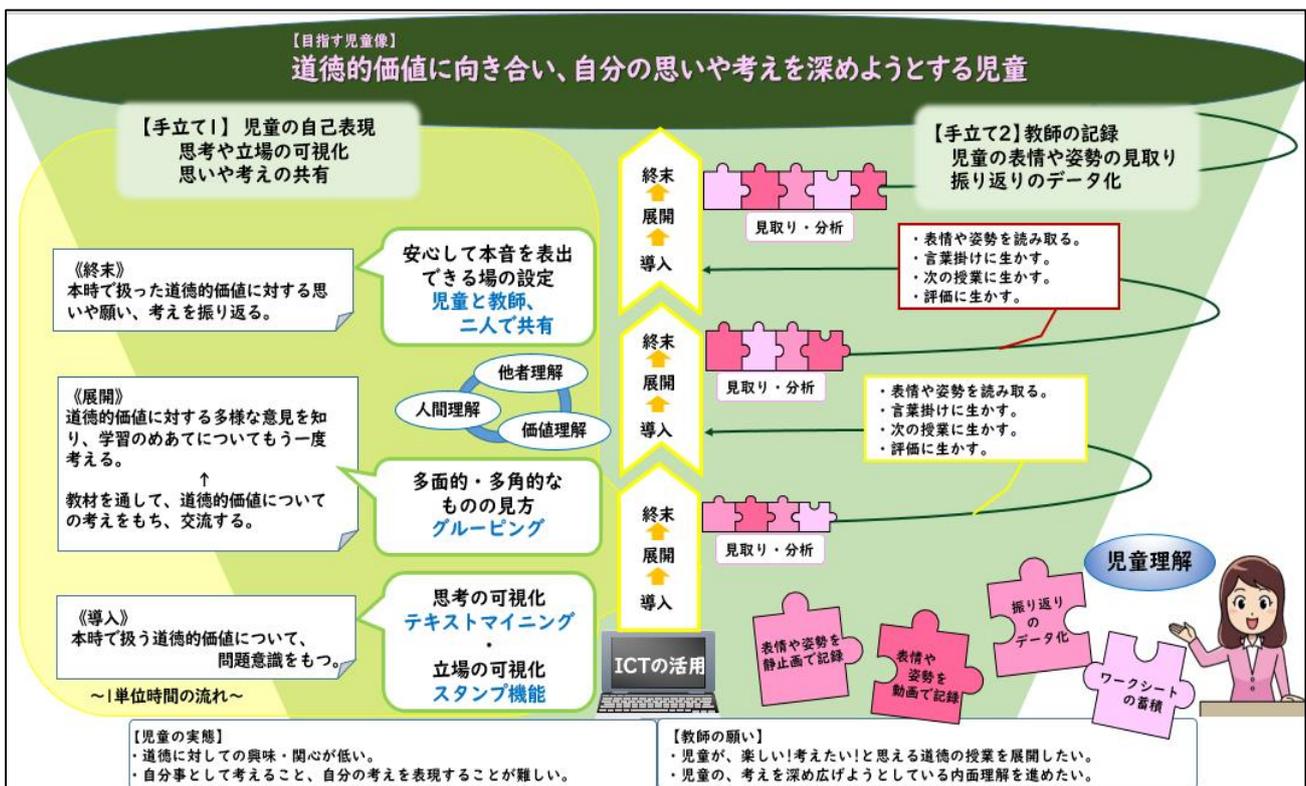
I 研究テーマ設定の理由

文部科学省「特別の教科道徳の指導におけるICTの活用について」によると、「答えが一つではない道徳的な課題を、一人一人の子供たちが自分自身の問題と捉え、向き合う、『考え、議論する道徳』への転換、『主体的・対話的で深い学び』の視点からの改善」が求められている。道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習をより効果的に行うための手段として、ICTの活用が必要である。実際の道徳科の授業においては、学習した過程や成果などの記録を蓄積しておくことや個人内評価として見取りを行うことの重要性も感じる。特に、文字や言葉での明確な表出はないが、考えを深め広げようとしている児童の内面理解を進めたいと考える。

自分事として考えたり自分の言葉で表現したりすることを苦手とする研究協力校の児童の実態から、ICTを活用して交流する場を設けることで、自分の思いや考えを深めることができると考えた。また、ICTで記録の蓄積を行うことで、児童の変容を読み取ることができると考えた。本研究では、ICTを活用した自己表現を取り入れることにより、児童が主体的に道徳的価値に向き合い、自分の思いや考えを深めるようになってほしいと願い、本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

児童が自分の思いや考えを深めることができるよう、ICTを活用して思考や立場を可視化する場、考えを共有し交流する場を設ける。また、児童が考えを深め広げようとしている姿を見取り、内面の理解を進めるためにICTを活用する。

【手立て1】 ICTを活用して、思考や立場の可視化を行ったり、思いや考えの共有を行ったりする。
【手立て2】 ICTを活用して、静止画・動画を蓄積し児童の表情や姿勢を記録・分析したり、児童の発言や振り返りをデータ化したりする。

【手立て1について】

ICTを活用して児童の思考や立場を可視化することにより、問題を自分事と捉えて授業に臨むことができるようになる。また、教材文における登場人物の視点から道徳的価値と向き合う際には、自分の考えを入力した後、即時に他の児童と共有することが可能である。ここで、自分とは異なる意見をもつ他者と議論することを通して、道徳的価値を多面的・多角的に考えることができるだろう。そして、他者との関わりをもちながら多面的・多角的な思考を働かせることにより、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中から深めることができるだろう。

【手立て2について】

道徳的価値のよさや大切さを考えたり、他者の考えを知って自分の考えを深めたり広げたりしている様子や、改めて自己を見つめ、自分の生き方についての考えを入力したり他者と共有したりする様子を記録する。この学習状況の見取りを継続し蓄積することで、児童の成長を積極的に認め、励ます個人内評価につながると考える。ICTを活用して、授業の記録を蓄積していくことは、児童の内面理解に生かすことができ、児童の学習改善や教師の指導改善にもつなげることができると思う。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 手立て1では、ICTの活用により次の場面で成果が見られた。まず導入場面で、児童の思考や立場を可視化することで、自分事として問題意識をもつことができた。また、交流場面で、ペアから4人組そして全体へと形態を広げ、全員が話し合いに参加することで、多くの新しい考えに触れることができた。その際、出された意見をグルーピングしながら多面的・多角的に考えを整理することで、生き生きと自己表現を行い、思考を更に深めることができた。学習のめあてについても一度振り返る場面でも、クラス全員の考えを可視化し共有することで、自分の考えを深めたり広げたりすることができた。
- 手立て2では、児童の記録を蓄積することで、表情や記入内容等、意識や取組の変容が見られてきた。この見取りによって、児童理解を深め、児童の学習改善や教師の指導改善につなげることができたと言える。また、道徳的価値について振り返る場面では、児童の振り返りをデータとして保存・蓄積し、一つのファイルにまとめることで、思考の変容を確認することが容易に行えるようになった。

2 課題

- 手立て1では、ICTを授業内に活用することで、即時に児童の変容を見取ることができる点で有効であったが、マイナスイメージを抱く言葉が表出されたり、価値のずれが生じたりする恐れがあった。全体で共有する前に教師側が確認してから掲示するなどの適切な対処が必要である。また、ICTを適切に活用していくために、授業場面ごとに活用する学習支援ソフトを選択する必要がある。
- 手立て2では、児童理解を更に深めていくために、蓄積した多くの記録を、効率的に整理・分析する方法を見だし、実践につなげたい。

実践例

- 1 主題名 広い心で 内容項目 B-(10)相互理解、寛容（第3学年・2学期）
教材名 「わたしだって」（出典：光文書院「ゆたかな心 3年」）

2 本主題について

(1) ねらいとする道徳的価値について

本主題は、学習指導要領第3学年及び4学年内容B-(10)相互理解、寛容「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、相手のことを理解し、自分と異なる意見も大切にすること」に基づくものである。人の考えや意見は多様であり、その多様さを相互に認め合い理解しながら高め合う関係を築くことが不可欠である。他者に対する寛容さと自分自身の謙虚さが一体のものとなったときに、広い心が生まれ、それは人間関係を潤滑にするものとなる。相手から学ぶ姿勢を常にもち、自分と異なる意見や立場を受け止めることや、広い心で相手の過ちを許す心情や態度は、多様な人間が共によりよく生きるために必要な資質・能力である。

(2) 児童の実態について

第3学年の児童は、1学期の教材「ドンマイ！ドンマイ！」（内容項目B相互理解、寛容）で、相手の思いを理解し、失敗を認め、許そうとする心の大切さについて学んだ。その後の児童の行動を記録すると、相手を理解しようという思いをもって行動している場面が見られる反面、友達の失敗を許せなかったり意見の違いを受け止められずに感情的になったりする場面も見られる。児童期は、多くの出来事の中で失敗を繰り返しながら成長していく時期と言えるため、自身の心が揺れる経験を重ねることで、相手の過ちを許す心や、異なる考えや意見を大切にすることのよさを実感できるようにしていきたい。そして、自分に対する謙虚さと、人に対する寛容な心をもとうとする心情を育みたい。

(3) 教材について

本教材では、友達の失敗をなかなか許すことができなかった主人公が、自身の失敗を快く許してくれたお姉さんと出会い、その心情について考えていく。友達を許す・許さないという場面は、普段児童が生活している中で起こりうることであり、身近な問題として捉えることができる。自分の失敗を許してもらった経験を想起することで、他者に対する寛容な気持ちについて考えさせたい。そして、この寛容な気持ちによって広がりや深まりのある人間関係が築けることに気付かせたい。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時では、ICTを活用し、下記の手立てを立てて取り組んだ。

【手立て1】ICTを活用して、思考や立場を可視化したり、思いや考えの共有を行ったりする。

- ・問題意識をもたせるために、「広い心」に対する児童の印象を、テキストマイニングを活用して可視化したり、「自分が大切にしているものを友達が誤って壊してしまったら、許すことができるか」という質問に対する各児童の心情を、学習支援ソフトのスタンプ集計機能で表したりする。【思考や立場の可視化】
- ・教材を通して道徳的価値の追求を行うために、帰りの車の中での主人公の心情を推し量り、児童一人一人が学習支援ソフトに入力する。その際、いくつかの思いを想起した児童は複数入力し、多様な意見のもとで交流が行えるようにする。交流は4人グループで話し合い、出された意見をグルーピングする。納得したり発見があったりした際には、学習支援ソフトの拍手機能やコメント機能を使うことで考えを深められるようにする。【思いや考えの共有】

【手立て2】ICTを活用して、静止画・動画を蓄積し児童の表情や姿勢を記録・分析したり、児童の発言や振り返りをデータ化したりする。

- ・道徳的価値に対する思いや考えを振り返るために、話し合いを通して改めて自己を見つめ、自己の生き方について考えたことを入力する。その際、本音を表出できるよう児童と教師二人で共有できる場を設定する。【思考の可視化】
- ・児童の姿から、道徳的価値を理解したり、他者の考えに触れて自分の考えを深めたり広げたりしているという内面理解を図る。【データ化・データ分析】（授業後）

4 授業の実際

導入

導入では、事前にアンケートを実施しておいた「広い心」のイメージについて、テキストマイニングを活用して視覚的に捉えやすいような形にし、提示した(図1)。「やさしい」や「心」という文字が現れたが、「楽しい」や「何かをあげる」というイメージの児童もいた。「広い心をもつために大切なことは何か」というめあてに向かう前に、全員で話し合う土台づくりができたと言える。

また、「大切なものを友達が壊してしまったときに許すことができるか」という質問に対する自分自身の心情を、学習支援ソフトのスタンプ集計機能を活用して表出した(図2)。「大切なものを壊されちゃったら、許せないな」と発言する児童がいた。「許せる人もいるんだ」と不思議そうに発言する児童もいた。思考及び立場の可視化を行うことで、本時の学習について問題意識をもつことができたと言える。

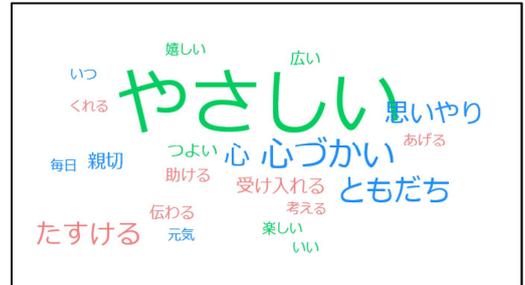


図1 「広い心」児童のイメージ（話し合い前）

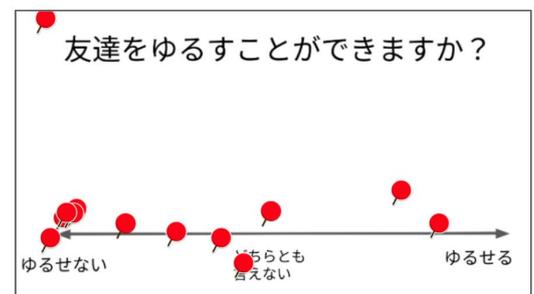


図2 「友達を許せるか」児童の心情（授業前）

展開

展開では、自分の考えをもった後、4人グループによる話し合いを行い、全体へと広げた。グループニングしながら話し合う際には下記のような会話が見られた。

(児童S1, S2, S3, S4)

- S1：これはグループAだね。これはグループB。これは？
（画面を見ながらグループニングしている。）
- S2：S3さん、もう一度話してみて。
- S3：「なんで、自分がいけないのにお姉さんは謝ってくれたのかな」って思った。
- S2：そうか。確かにそうだね。A、Bどちらにも入るけど…。
- S4：AでもBでもないから、その他のグループにしよう。S3さんの考えに似ているのがあるかな？



図3 話し合いの様子

グループでの話し合いでは、似た意見をグループピングして、共有した考えを整理した。意見の交流を行うことで、自分の意見についてもう一度深く考える様子が見られた(図3・図4)。また、友達の考えを知り、納得したり自分にはない新しい発見があったりした場合には拍手機能やコメント機能で表した。このような交流から自分と他者の考えの違いや共通点に触れ合うことができたと言える。また、自分の意見が認められること、話し合いの土台となっていることを実感している様子が見られ、活発な意見交換が行えるようになった。

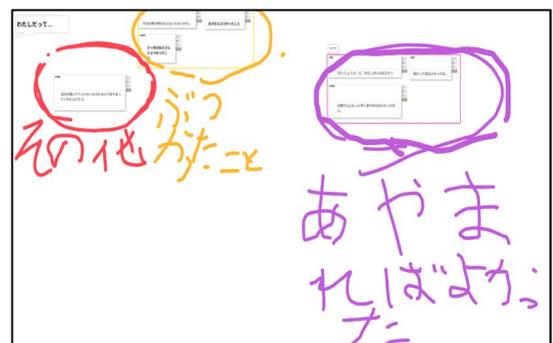


図4 グループピングしたICT端末の画面

めあてについてもう一度振り返る場面で、導入と同様に、学習後にもった「広い心」についてテキストマイニングを活用し視覚的に提示した(図5)。「人相」という文字が大きく表示され、他に数個の熟語が表示された。多くの児童が「相手の気持ちを考えること、周りの人のことを考えること」と記述していたことが分かった。本時の道徳的価値に近づくことができていると言える。

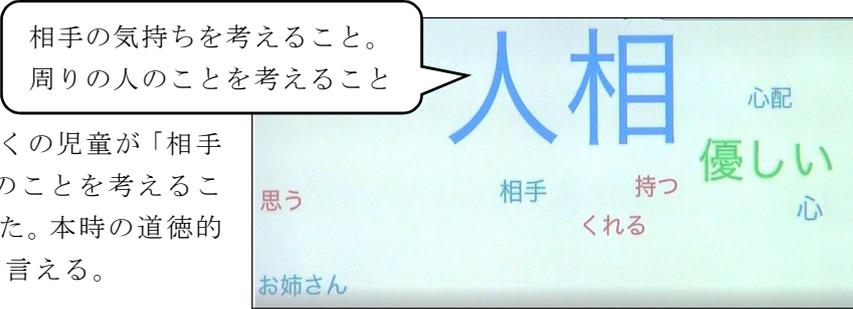


図5 「広い心」のイメージ(話し合い後)

終末

終末では、話し合い活動で深まった考えを基に、改めて自分自身を見つめて生活を振り返り、「広い心をもつために大切なことは何か」について考えたことを入力する活動を行った。その際、児童の入力内容は、他の児童の目には触れず、児童と教師の二人のみで共有できる場を設定した。入力内容は、今までの生活と比べたり、これからの自分の生き方に生かそうとしたりする様子が見られ、安心して本音を表出できる場となったと言える。

授業後

表1は同じ内容項目(相互理解、寛容)の学習後の振り返りである。記載内容を比較することは、児童の変容を見取る一つの方法として有効であると言える。

表1 振り返りの蓄積・変容

	ドンマイ!ドンマイ! 【相互理解、寛容】(5月)	わたしだって【相互理解、寛容】(本時・10月)
A	友達とかが失敗しても責めない。	私は大事なものをこわされたとき、どうすればいいのかわからないけど、「わたしだって」の道徳をやって、私は広い心をもつためにやさしい心をもって、自分がいやでもその人がちゃんとあやまってくれれば許せるので、それで私は広い心をもてるようになりたいです。
B	これからやる試合は負けないぞ。	もっと人にやさしくしたい。
C	友達とこういうことがあるので、これからこういうことに気がついていきたいと思います。	これからの生活は、この広い心をもってこれから生活したいです。そしてこれまでの生活ですぐにあやまらなくて1日ぐらいたってからあやまったことがあったので、気をつけたいです。

5 考察

問題意識をもたせる場面では、テキストマイニングや学習支援ソフトのスタンプ集計機能を活用した。その結果、自分の思考や立場を可視化でき、自分事としての問題意識をもちながら主題へ向かうことができた。話し合いの場面では、画面上で児童同士の意見を共有しながらグルーピング等を行い、自分と似た意見や新しい考えに出会うことができた。「広い心」について多面的・多角的に考え、思考を深めることができたと言える。また、ICTの活用により、他者の意見を短時間で確認することができたため、短縮された時間で意見の交流を多く行うことができた。したがって、話し合い活動を活発化させることも可能になったと言える。さらに、ICT端末へ入力することで、発言に消極的だった児童も、自分の考えを表すことができるようになった。自分の意見を基に、話し合い活動が展開されるため、自己有用感の高まりにもつながったと考えられる。

教師の記録として、ICTを活用したことで児童の振り返りの蓄積が容易に行えるようになった。毎時間の授業記録をデータとして保存していくことで、児童の思考の変容を見取ることが容易になった。この見取りは、児童理解を深めたり、児童の学習改善や教師の指導改善につながったりすることも分かった。

これらを毎時間積み重ねることは、道徳的価値に向き合い自分の思いや考えを深める児童の育成に有効に作用するであろうと考える。